

2025年10月

なぜ「私」は生み出されたのか？

脳によって仕掛けられた難解なトリック

白石 茂

まえがき

このテーマからは哲学の話なのか？宗教の話なのか？それとも道德の話をしてしようとしているのか？疑問に思われるかもしれません。しかしそうではありません。すでにネットに「心はどこにあるのか？」という論文をアップしてありますが、今回の論文はその続編ということで、科学の立場から「私という存在」を更に掘り下げる試みです。

「心はどこにあるのか？」の論文を既に読んでくださっている方には不要かと思いますが、まずはその論文の概略と補足の説明を行い、次に今回の論文の本題に入りたいと思います。なお、論文「心はどこにあるのか？」、並びにのちほど引用する論文「見えるとは何か？」と「私とは何か？」の URL は「あとがき」に記しておきます。

言葉の定義

話を始めるにあたり、言葉の使い方について3つ説明しておきたいことがあります。1つ目は論文の表題にあるように、カギカッコを付けて「私」と表記する理由です。この点についてはのちほど（1－3）「心の世界に内在する「私」の定義」で詳しく説明することになりますので、取りあえずは一般的な解釈で読み進めていただいて構いません。

図1

目の前の世界



2 つ目は、これから頻繁に用いることになる「目の前の世界」や「目の前に見えている世界」などの、「目の前の」と「目の前に」という言葉の意味についてです。図1をご覧ください。一見奇妙な構図の絵ですが、私、あるいはあなたの目を

通して見えている世界です。つまり、私たちが目を閉じるとそれまで見えていた世界が見えなくなり、目を開けると再び見えるようになります。その見えている世界を「目の前の世界」や「目の前に見えている世界」などと表現して用いることになります。のちほど（1－1）項で説明しますが、それは物質の世界のことを指した言葉ではありません。ご留意いただければ幸いです。

3 つ目は、これも頻繁に用いることになりますが、「見かけの」という言葉です。これは2通りの意味で用いることになります。つまり「存在」と「行為」の2通りの意味で用いることになりますが、これも詳細は後ほど（1－3）「言葉の整理」でまとめて説明することになります。取りあえずは「一般常識で考えられているものとは異なる」といった意味だとお考えください。

目次

第1章 論文「心はどこにあるのか？」の概略と補足の説明

（1－1）見かけの世界

（1－2）「私という存在」の問い直し

追加の説明 私が見ている？ 私が考えている？

（1－3）心の世界に内在する「私」の定義

私という思い、言葉の整理、図による整理、まとめ

第2章 心理空間

(2-1) 心理空間の特徴

- (1) 対象の存在位置は一致しない
- (2) 特性の重ね合わせ

(2-2) 存在と認識

第3章 なぜ「私」は生み出されたのか？

(3-1) 「私」を構成する2つの要素と2つのシステム

- (1) 見かけの身体
- (2) 見かけの心
- (3) 見かけの行為
- (4) 重ね合わせと同調のシステム

(3-2) 心の世界の中の「私」という存在

- (1) 自らの心の世界に内在する「私」
- (2) 外界のコピーであることの意味
- (3) 「見かけの行為」から「私という思い」の生成
- (4) 2つの世界を結ぶ記憶の役割
- (5) なぜ「私」は生み出されたのか？

まとめ 追記 あとがき 自己紹介 論文のアドレス

第1章 論文「心はどこにあるのか？」の概略と補足の説明

(1-1) 見かけの世界

すべての出発点は目の前に見えている世界は脳の活動によって生み出された、言わば「見かけの物質の世界」である、という事実の理解から始まります。これが前述の3つの論文の第1の論点でした。その事実からは、目の前に見えている自らの身体も脳の活動によって生み出された、言わば

「見かけの身体」であるという事実が導かれることになります。更には、「脳の活動によって生み出された世界を心の世界と定義する」とした場合、それら目の前に見えている自らの身体を含めた世界は「心の世界」ということになります。もちろん物質の世界と肉体としての身体が存在するという前提条件のもとでの話です。

目の前に見えている世界が物質の世界ではなく、見かけの物質の世界であるということは比較的理解しやすいことであり、哲学、心理学そして認知科学などを専門にする人以外でも、そのように主張する人は案外数多くおいでです。しかし目の前の自らの身体が脳の活動によって生み出された見かけの身体であると主張する人の数は少ないようです。私自身、目の前の世界が見かけの物質の世界であることは比較的早い段階で理解できていたのですが、脳の活動によって生み出された見かけの物質の世界が、なぜ自らの身体の外に存在しているのかは謎でした。目の前に見えている自らの身体を肉体としての身体である、と思い込んでいたわけです。その謎が解けたのは案外簡単な理由からでした。

目の前に見えている世界が物質の世界であるとするといろいろと矛盾が生じますが、その1つとして「色についての反例」を挙げることができます。つまり、色は物質の世界には存在しない。物質としての対象で反射した電磁波は眼の網膜に像を結び、電気信号に変換されて脳に到達する。その脳の活動によって色は生み出され、それが目の前の世界を彩っている。従って目の前の世界は物質の世界ではなく脳の活動によって生み出された見かけの物質の世界である、という論理です。この論理を延長すれば、目の前に見えている自らの身体にも肌色という色が見てとれる。従って目の前の身体も脳の活動によって生み出された見かけの身体である、ということになります。もっとも、これだけの説明でみなさんを納得させることができるとは思っていませんが、目の前の自らの身体の解釈が目の前の世界の理解を妨げているのは間違いないでしょう。

目の前の世界を物質の世界であるとする、いまお話した「色についての反例」のようにいろいろと矛盾が生じます。同様に目の前の身体を肉体としての身体であるとする、やはり矛盾が生じます。その詳細につい

ては前述の論文「心はどこにあるのか？」の第3章第4節、あるいは「私とは何か？」の第3－2項で詳しく説明していますので、そちらを参照していただければ幸いです。

今回の論文は、目の前に見えている世界も自らの身体も、脳の活動によって生み出された「見かけの物質の世界」、そして「見かけの身体」であるという出発点からの話になります。「馬鹿らしくて付き合いきれない」と思われるかもしれませんが、しばらくお付き合いいただければ幸いです。単なる思い付きや推測の話をするつもりはありません。理詰めで話を進めていくことになります。

（1－2）「私という存在」の問い直し

前述の3つの論文のうち1つの論点は、私たちが日ごろ「私」と捉えているものは、実は「自らの心の世界に内在する存在である」、ということの説明にありました。論文では、心は脳の活動によって生み出されること、また身体と心は質的に異なるものの両者は切り離せない存在であるという観点から

私＝私の身体＋私の心 ①

と定義して話を始めています。

一般常識では、「私の身体」は物質の世界に存在する肉体としての身体であり、「私の心」は知、情、意という言葉で示されるような活動をしている抽象的な存在であると捉えられていると言えるでしょう。もちろん、そのように私という存在を定義しても、何ら問題はありません。つまり、一般常識での私は、

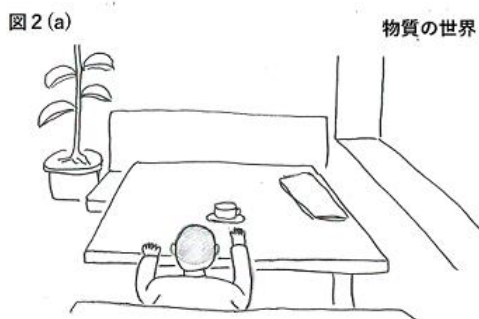
私＝肉体としての身体＋私の心（知、情、意で示されるような抽象的な存在） ②

ということになります。

しかし注意していただきたいのは、ここで問題にしているのは物質の世界の話ではなく「目の前に見えている世界」、つまり「脳の活動によって

生み出された心の世界」の話をしているという点です。従って「私の身体」は目の前に見えている身体であり、いまお話したように、それは脳の活動によって生み出された「見かけの身体」であることになります。

ではいま1つの「私の心」について考えてみましょう。私たちは、私が見る、私が聞く、私が感じる、私が考える、私が思い出す、私が話す、私が判断する、私が決断する、というように、「私の心」は様々な活動を行っていると考えています。しかし実際はそうとは言えないようです。例えば、「私が見る」という行為について考えてみましょう。詳しくは論文「見えるとは何か？」で解説しますので、ここでは簡潔な説明に留めます。



例えば、「コーヒーカップを私が見ている」という状況について考えてみましょう。図2(a)はわかりづらい構図の絵ですが、ある人物の背後からその人物の前方に広がる物質の世界を表したものです。確かに

「物質の世界」では「見るという行為」が定義できます。つまり物質としてのコーヒーカップに肉体としての身体の眼を向けることは「見ている行為」そのものです。一方、図2(b)に示すような「目の前の世界」においては「見るという行為」は定義できません。なぜなら目の前の世界は脳の活動によって生み出された見かけの物質の世界であり、また目の前の身体は見かけの身体であり、それには肉体としての身体に備わっているような眼は存在しません。

したがって見かけの身体には「見る」という機能は備わっていないことになるからです。

目の前のコーヒーカップは、見るという行為の結果、その位置に存在している「見かけの存在」であると言えます。何故なら図2(b)の人物は「私が見ている」という思いを抱いてはいるものの、実際は「見ている」わけではないからです。その事実を覆い隠すように、見かけの身体に備わっていると思い込んでいる「見かけの視線」の逆方向に、「見ている私がいる」という思いが用意されることになります。

因みに、物質の世界には色が存在しないことから、物質の世界を表す図2(a)と、次に用いる図2(c)のカップに色はつけられていませんが、心の世界を表す図2(b)には色がつけられています。



[追加の説明]

目の前の世界が脳の活動によって生み出された見かけの物質の世界であるという考えは、納得のいかない話だと思います。この考えがもし間違



いであれば、これからお話しする私の主張はすべて根底から崩れ去ることになります。そこで別の視点から改めて説明してみたいと思います。

図2(a)の物質の世界の情景を側面から表した図

2(c)をご覧ください。テーブルの上にコーヒーカップが置かれています。一方、右側には、その情景を見つめているある人物の肉体としての身体が存在しています。両者の間は物理的に完全に隔てられています。カップとその人物の肉体としての身体を結び付けているのは、視覚を例にとれば、カップから送られてくる電磁波だけです。両者を結びつけているのはそれ以外には何も存在しません。しかもそれはカップから人物に対しての一方通行であり、その人物からカップに向けての働きかけは何一つありません。敢えて言えば、肉体としての身体に備わる眼をカップに向けることぐらいのものです。ただし、視線を向けたからと言って物質の世界そのものが取り込まれるわけではありません。取り込まれるのは電磁波だけです。それから得られるのは、眼の凸レンズを介して網膜に映る上下、左右逆さまのコーヒーカップの像だけです。

ところが私たちは、肉体に備わる眼をカップに向けることで、図2(b)に示すように、目の前の世界にカップを含めた見かけの物質の世界が立ち現れることから、この状況を図2(a)に示す物質の世界に重ね合わせて考えてしまうという間違いを犯すことになります。その結果、目の前の世界は物質の世界であると誤って認識してしまうことになります。

確かに、物質の世界において、肉体としての身体の周囲に物質の世界が存在しているのは間違いのない事実であり、その前提で話を進めています。視線の移動に伴い、目の前に見かけの物質の世界が継続的に立ち現れることから、それが物質の世界であり、それを「私が見ている」と思うのは無理のないことかと思えます。

この点についての分かりづらさは、見るという行為に関して、「見る」と「見える」という2つの動詞が使用されていることからわかります。「何を見えていますか？」と問われれば、「目の前のコーヒーカップ」と答えます。一方、「何が見えますか？」と問われれば、「目の前のコーヒーカップ」と答えることになり、目の前のコーヒーカップは二面的に解釈されていることがわかります。私たちの思い違いを覆い隠すために、他動詞と自動詞の2つが用意されているわけです。繰り返しになりますが、確かに肉体としての身体の周りには物質の世界が存在しています。このような

誤解の根本原因は、目の前の見かけの身体を肉体としての身体であるとする誤った解釈にあります。この点については先にもお話したように、論文「心はどこにあるのか？」の第3章第4節、並びに論文「私とは何か？」の第3－2項で詳しく説明していますのでそちらを参照していただければ幸いです。

私が見ている？

目の前のコーヒーカップは、物質としてのカップではなく、見るという行為の結果、脳の活動によって生み出され、その位置に存在している「見かけの対象」であるというのが本来の意味になります。つまり「私が見ている」わけではなく、「対象が目の前のその位置に存在している」ということです。図2(b)に当てはめれば、目の前のコーヒーカップは「私が見ている」という行為とは直接的な関係はなく、見えているその位置に存在しているということです。したがって、このときの「私が見ている」という思いを伴う行為は「見かけの行為」であり、また「見ている私がいる」という思いに伴う「私の心」は、見るという行為を実際に行っているわけではないことから、言わば「見かけの心」であると言えるでしょう。事実、既にお話したように、真の意味での「心の世界」は、目の前の自らの身体を含めた目の前の世界全体だからです。今後は、真の意味での「心の世界」と区別して、一般常識としての心を「見かけの心」と表して用いていくことにします。

「対象が見えているその位置に存在している」という表現に、当たり前のことではないかと思われるかと思います。確かに物質の世界ではその通りでしょう。しかし、いまお話しているのは物質の世界の話ではなく、脳の活動によって生み出された見かけの物質の世界、つまり心の世界の話であることにご注意ください。決して当たり前のことではありません。

目の前のコーヒーカップを見ているわけではないのにその存在がわかるということは、目の前の対象そのものが「存在であると同時に認識でもある」ことを意味することになります。認識というと目の前の世界など

とは別次元の高度な機能であり、言わば心の奥深くにおいて行われると思われがちですが、たとえそれが低次の認識の形態であるとしても、「目の前に存在している」ことは、認識の一形態であることに間違いはないでしょう。

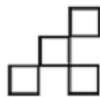
事実、目の前に見えている世界は脳の活動によって生み出された心の世界ですから、それを考えれば別段奇妙なことではないでしょう。また、目の前の存在が同時に認識でもあるという事実は、「私という存在」について考えるとき重要な意味を持つことになります。認識については前述の論文「心はどこにあるのか？」の第4章第2節で、あるいは「私とは何か？」の第4－2項で詳しく説明していますので、参照していただければ幸いです。

また存在と認識については後ほど第2章の（2－2）でもお話することになります。

私が考えている？

前述の3つの論文では扱っていませんが、いま1つ図3を例にして、「私が考えている」という行為について検討してみましょう。

図3(a) 図形の反転



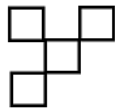
まずは図3(a)に示す図形を心の中で上下反転し、さらにその図形を左右に反転してみてください。さほど難しい課題ではないと思います。その結果どのような図形になるかは次のページに示しておきます。

私たちはこのような課題を前にして、目の前の図形を手掛かりにして、そのイメージを「見かけの心」の中でいろいろと動かすと思います。多分その背景には、脳の情報処理が働き、ごく短時間の記憶が関与してイメージを保持しているものと推測できます。それと同時に私たちは、目の前のイメージを操作することを通して

「私が考えている」という思いを抱くと思います。確かに脳の機能として、目の前の図形に対してイメージの操作が行なわれているのは間違いないでしょう。しかし、先にもお話したように、「私が目の前の図形を見ている」ことはありません。それは「見えている」だけのことです。それにもかかわらず答えを導くことができるということは、「私が考えている」という思いを持つものの、それは「見かけの行為」であると言わざるを得ません。

「私が見ている」という思いに伴う「私という存在」は、前述したように、言わば「見かけの存在」であるのと同様に、「私が考えている」という思いに伴う「私という存在」は、「見かけの存在」であると言えるでしょう。もっとも「見かけの行為」、

図 3(b) 反転の結果



「見かけの存在」とは言っても、何の役にも立たないものが目の前の世界に存在しているとは思えません。

図 3 (a) に示す図形についても同様なことが言えます。考える上での手掛かりになっているはずですが、この点

についてはのちほど $(3 - 1)$ 項で検討することになります。

因みに上下左右反転した図形は図 3 (b) のようになります。

別の例として、数学の問題を解く場合について考えてみましょう。数学の試験を受けているとき、解けそうだけれど解けなくて時間ばかりが過ぎていき、残念な気持ちで教室を後にするということは、多くの人が学生時代に経験しているのではないのでしょうか？ そのあと、その問題について別段考えていないものの、答えが突然わかるという経験を持つ人もまた多いかと思います。

あるいは、新しい発見やアイデアは散歩中や、風呂に入っているときなどリラックスしているときに不意に思い浮かぶということも、数多くの研究者が発言しているところです。もちろんそれ以前に、その問題にじっくり取り組んでいるということが前提条件であることは間違いないでし

よう。

このような例からもわかるように、私たちには「私が考えている」という思いがあることから、問題解決は意識して取り組んでいるときだけ行われると思いがちですが、そうでないことがわかります。すべての思考に当てはまることではないでしょうが、「私が考えている」という行為も脳が自動的に情報処理をしている結果である場合が多いのもまた事実でしょう。

(1-3) 心の世界に内在する「私」の定義

「私が見ている」と「私が考えている」の2つの例を示しただけで、これらからすべてを結論づけるには問題があるかと思いますが、「私がこれらの行為を行っている」と思っているときの「私」は、具体的に何かしらの行為を行っているわけではなく、それは実体を伴わない「見かけの行為」であることがわかります。つまり「私が見ている」と「私が考えている」という思いのもとに行われている行為を「私の心」の知、情、意の知の部分で行われていると解釈するのであれば、「私の心」は実体を伴わない「見かけの存在」とであると捉えるのが妥当なようです。

従って、①の図式は

$$\text{「私」(見かけの私)} = \text{見かけの身体} + \text{見かけの心} \quad \text{③}$$

と表されることになります。

③式で示される「私」を改めて「私」と定義することにします。つまり「私」という存在は「見かけの身体」と「見かけの心」から成り立つ、言わば「見かけの存在」であり、「実体を伴う行為」を行っているわけではないことを表しています。③式を逆の視点から考えてみると、次式④に示すように「見かけの身体」と「見かけの心」から「私」が生み出されと解釈できることになります。この点については(3-2)項で話を進めることにします。

$$\text{見かけの身体} + \text{見かけの心} \rightarrow \text{「私」の生成} \quad \text{④}$$

ここで、一般常識で心はどのように捉えられているかについて改めて

見直しておきたいと思います。知、情、意という言葉が示すように、「知」は見る、聞く、考える、話す、覚える、などを表し、「情」は喜び、怒り、悲しみ、などを、そして「意」は決断する、実行する、などを表すと言えます。これらは何れも脳の活動によって営まれると考えられていますから、「心は脳の活動によって生み出される」と言えましょう。また同時にこれらの行為は「私という思い」のもとで行われる、という事実には注意を払う必要があります。

「私という思い」

「私がこれらの行為を行っている」という思いのもとに、「私」が知、情、意にまつわる行為を行っているとは一般常識では考えられています。しかし繰り返しになりますが、実際はそうではなく、「実体を伴う行為」を行っているわけではないことは今しがたお話した通りです。もっとも「私がこれらの行為を行っている」という思いが実際に存在しているわけですから、「私という思い」の存在は否定されるわけではありません。これも先にお話ししたように、目の前の対象を見ていると思っているとき、その見かけの視線の逆方向に「見ている私がいる」という思いが存在しているのは事実です。ただしそれは私たちが思い描いているものと異なるのは間違いありません。何故なら、私たちが一般常識として思い描いているような具体的な行為を「見かけの身体」と「見かけの心」から成る「私」が行っているわけではないからです。

この「私という思い」を伴う「見かけの心」は「見かけの身体」とは異なり、直接認識することはできません。「見かけの身体」であれば、目の前の世界に存在することが同時に認識でもあるわけですから、見かけの視線を向けることでその存在を認識することができます。しかし、もう一方の「見かけの心」は直接認識することはできません。「私がこれらの行為を行っている」という思いによってしか、その存在を認識することはできません。つまり、「私が見ている」、「私が考えている」などの思いで

しかその存在を認識することができません。それが、「見かけの身体」と「見かけの心」から成る「私」という存在が、捉えどころのない神秘的な存在であると考えられている原因だと思われます。

この「私という思い」という言葉は、哲学用語の「自己認識」や「自己意識」に似ているかもしれませんが。確かに類似点があるかと思いますが、「私という思い」は「私が見ている」などの表現にみられるように、「行為」に結びついた概念であることから、「自己認識」や「自己意識」とは異なる意味の言葉として用いることになります。ただ、「私という思い」と「自己認識」が似ているのは事実ですので、取り敢えずは両者が同じ意味であると解釈して読み進めていただいても構いません。

ここで1つ指摘しておきたいのは、「私の心」が知情意から成るとしたとき、「私という思い」は「見かけの心」の中核を担うものであるということです。詳細については、のちほど（3－2）の（3）と（4）項でお話することになります。

[言葉の整理]

もともと分かりづらい話であることに加え、紛らわしい言葉を用いていることで話が更に分かりづらくなっているものと思います。そこで言葉の意味を明らかにすると共に、図2を再度用いることで、これまでの話をまとめることにしたいと思います。

まずは「見かけの」という言葉の意味ですが、それは私たちが一般常識で考えている意味とは異なります。大きく分けて2つの意味で使い分けています。

1つは、「その元となる対象」が物質の世界に「存在」している場合です。「見かけの物質の世界」、「見かけの対象」それに「見かけの身体」という言葉がそれらで、それらに対応するのは「物質の世界」、「物質としての対象」、そして「肉体としての身体」であることになります。まとめると次のようになります。

見かけの物質の世界→物質の世界

見かけの対象→物質の世界に存在する物質としての対象

見かけの身体→肉体としての身体

いま1つは、「存在」に対して「行為」に着目して用いている場合です。例えば、先にお話した「私が見ている」という行為がそれにあたります。確かに肉体としての身体は見るという行為を行っていますが、目の前の世界においては見かけの視線を見かけの対象に向けてはいるものの、実体を伴う行為を行っているわけではありません。あるいは別の例として、目の前のコーヒーカップに向けて見かけの手を伸ばすとき、物質の世界では肉体としての手がカップに向けて伸ばされているのは事実ですが、目の前の見かけの手が物質としてのカップに対して実体を伴う行為を行っているわけではありません。

脳は様々な活動を行っているわけですから、視覚などについて情報処理を行っているのは事実ですが、脳の活動によって生み出される世界を心の世界とする定義のもとでは、「見かけの身体」と「見かけの心」から成り立つ「私」がそれらの実体を伴う行為を行っているわけではない、という意味で「見かけの行為」という言葉を用いています。

「見かけの心」という表現は、「本来の心の世界」が目の前に広がる世界全体であるのに対し、「見かけの心」は見かけの身体の頭部に位置し、実体を伴う行為を行っていないことを表しています。一般常識の心とは異なることにご注意ください。

「見かけの私」という言葉は「私」と同じ意味で、「見かけの身体」と「見かけの心」から成り立つ、という意味で用いています。

この論文で扱うのは、この実体を伴う行為を伴うことのない「見かけの存在」としての「私」についてです。図にまとめると次のようになります。

[図による整理]

では図2を再度用いてこれまでの話をまとめてみましょう。まず図2(a)ですが、これは物質の世界を表しています。物質の世界に肉体としての身体が存在し、その頭部に位置する脳によって情報が処理されています。これが②式で示される状態を表しています。

一方図2(b)ですが、この図全体で示されるのが「目の前の世界」であり、脳の活動によって生み出された「心の世界」を表しています。分かりづらい図ではありますが、私あるいはあなたの眼を通して得られる世界のことです。その「心の世界」の中に「見かけの対象」であるコーヒーカップ、さらに私あるいはあなたの「見かけの身体」の一部である腕と足が描かれています。

「見かけの心」は直接図に表すことはできませんが、見かけの身体の頭部に位置し、「私が見る」、「私が考える」などの見かけの行為によって間接的に認識されるものです。別の視点から表現すると、「自らの心の世界の中に、見かけの身体と見かけの心から成る「私」が内在している」状況を示しています。これが③式で示される状況を表しています。

これもまた、直接図に表すことはできませんが、「見かけのコーヒーカップ」に「見かけの視線」が向けられています。前にもお話したように、見かけの身体に眼は備わっていません。また情報を処理するための脳も存在していません。それにもかかわらず「私が見ている」という思いが「見かけの視線」の逆方向に生み出されています。あるいは「私が考えている」という思いも見かけの行為であることから、そこに表されるのは「見かけの心」であり、その活動を行っていると思われる「見かけの私」であることを表しています。

因みに、論文「心はどこにあるのか？」では「見かけの心」、あるいは「いわゆる心」という言葉が用いられ、論文「私とは何か？」では「見かけの心」が用いられています。

この論文では、「見かけの心」という言葉を用いて話を進めることになります。

まとめ

ここまでが論文「心はどこにあるのか？」の概説と補説です。まとめれば次の4点になります。

- ① 目の前に見えている世界と身体は、脳の活動によって生み出された見かけの物質の世界と見かけの身体である。「脳の活動によって生み出された世界を心の世界と定義する」と、それらはすべて心の世界に内在する見かけの存在である。
- ② 目の前の世界では「私が見る」などの行為は存在せず、それらは「見かけの行為」である。目の前の対象の存在がわかるということは、それらすべてが存在であると同時に認識でもあることを意味する。
- ③ 「私」は「見かけの身体」と「見かけの心」より成り、「自らの心の世界に内在する」ものである。一方「私という思い」は、「これらの行為を行っている」という思いのもと、見かけの視線の逆方向に位置し、それは直接認識することはできず、「これらの行為を行っている」という思いででしか認識することはできない。
- ④ 「見かけの」という言葉は、無意味なとか、不必要な、という意味ではなく、一般常識と異なるという意味である。事実、脳は不必要なものを生み出すはずはなく、(3—2)の(3)項でお話するように、情報処理において重要な働きを担うと考えられる。

第2章 心理空間

論文「心はどこにあるのか？」の話が長くなりましたが、自らの心の世界に内在する「私」がどのようにして生み出されたのか、そして何故生み出されたのかについて考察を進めることにしましょう。

(2—1) 心理空間の特徴

目の前に広がる世界は、見かけの身体を含め見かけの物質の世界であ

り、いずれも脳の活動によって生み出された世界、つまり心の世界ということになります。したがって、心を構成するとされる知、情、意のすべてがそこに含まれることになります。そこで、それらすべてを含む空間を新たに「心理空間」と定義して話を進めることにします。今後も見かけの物質の世界、見かけの対象、見かけの身体という言葉を用いることとなりますが、心理空間という言葉は物理空間と対比させる形で用いることとなります。物理空間が物質の存在する空間という意味を持つのと同様に、心理空間は見かけの物質の世界、それを構成する見かけの対象、そして見かけの身体が存在する空間という意味で用いることとなります。ただし心理空間が物理空間と独立して存在するのかどうかについては、ここで論じることは差し控えます。

(1) 対象の存在位置は一致しない

心理空間を物理空間と対比させて考えるとき、留意すべきことを2つ挙げておきます。1つ目は、心理空間での見かけの対象と、物理空間でそれに対応する物質としての対象の存在位置は一致していないという点です。例えば、目の前のコーヒーカップに見かけの手を伸ばしてそれを掴もうとするとき、間違いなくそれを掴むことができます。このような経験から、心理空間での見かけの対象とそれに対応する物理空間での物質としての対象の存在位置が一致しているかの印象を持たれるかと思います。確かに、見かけの身体の前に見かけのコーヒーカップが存在し、一方、肉体としての身体の前に物質としてのコーヒーカップが存在するという「相互の位置関係」が一致していることは間違いのないことで、それを否定するつもりはありません。ここで指摘しておきたいのは、物質としてのコーヒーカップと肉体としての手が、いま正に見えているその位置に存在している、という考えは間違いだということです。厳密な表現ではありませんが、端的に言えば、いま見えている見かけの対象の裏返しの位置に物質としての対象が存在している、ということはないということです。更に言えば、心理空間と物理空間とが表裏一体の関係にはないということです。

事実、目の前に見えている世界は脳の活動によって生み出された心の世

界であり、物質の世界とは直接的な関係はありません。見かけの手を伸ばすことで物質としてのコーヒーカップを掴むことができるのは、両者が同調するようなシステム、つまり「同調のシステム」が備わっているからです。私たちが日ごろの生活をスムーズに行うことができているのは、両者を巧みに結び付けている同調のシステムが優れていることにあります。しかし完璧ではありません。そのシステムが混乱をきたす事例はたくさんあります。例えば、鏡に向かって櫛を使って髪をとかすとき、左右の動きに狂いは生じませんが、鏡に映った世界では奥行方向が逆転しているので、慣れていないと上手く櫛を使うことができないのではないのでしょうか。「それは鏡に映った世界のことで、現実の世界のことではないからだ」というご意見もあろうかと思いますが、鏡に映った世界も脳の活動によって生み出された見かけの世界であることにご留意いただければと思います。

（２）特性の重ね合わせ

２つ目は心理活動に伴う特性の重ね合わせの問題です。心理空間には知、情、意という言葉で示されるように様々な心理活動が存在しています。例えば視覚については見かけの対象、聴覚については見かけの音が存在しています。更には見かけの身体に関連して触覚、圧覚、味覚などが存在し、より高度な活動として情動、記憶、学習、思考、言語などが存在しています。それら異なった種類の活動内容がどのようにして心理空間の適切な位置に配置されるのかということ、つまり「重ね合わせのシステム」に注目する必要があります。

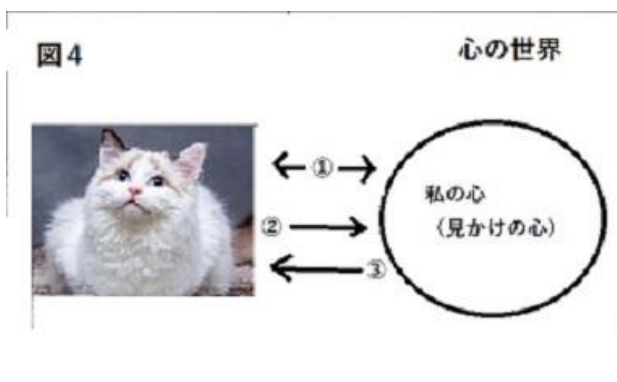
よく知られていることに、聴覚に対しての視覚の優位性の例が挙げられます。例えば、テレビの音声をイヤホンで聞いているとき、登場人物の声は耳元で聞こえているはずですが、事実画面を見ていなければ耳元で聞こえます。しかし画面を見ていると、登場人物の口元から声が聞こえてくるように感じます。聞こえているように感じるというよりも、口元に声が存在しています。「声が存在している」という表現に違和感を持たれるかもしれませんが、「声はどこに聞こえますか？」と問われれば、口元と答え

る他に選択肢はありません。音も存在していることに間違いはないはずであり、存在するからにはその存在位置が特定できるはずです。このような疑問は、聴覚が視覚や触覚に比べるとその存在位置が特定しづらいことに原因があるのでしょうか。このように異種の特徴が心理空間において重なり合うことを重ね合わせのシステムと呼ぶことにします

このような異種の特徴が同じ心理空間の適切な位置に配置されるのは、感覚に留まりません。感情についても同様です。例えば、目の前に子猫が現れれば、可愛らしいという思いがいわゆる「見かけの心」に生じますが、それと共に、その可愛いという思いが目の前の子猫に重って生じているのがわかります。

あるいは目の前に虎がいる場合についても同様です。それが動物園の鉄格子の向こう側であれば、大きな猫という思いから可愛いという思いを抱く人がいるかもしれません。しかし、それが密林の中でふいに目の前に現れたとなれば、その恐怖がいかほどのものであるかは想像にかたくありません。このときの恐怖は「見かけの心」の中のことであるのと同時に、虎そのものにも付随するものです。

このように異種感覚や感情が目の前の対象に重なり合うことは、目の前の世界が脳の活動によって生み出された心の世界であることを考えれば格別不思議なことではないでしょう。



ここで問題になるのは、猫を前にしたときの「可愛いという思い」と「目の前の猫」との関係です。つまり、図4に示すように、「可愛いという思い」が、

①「見かけの心」

から「目の前の猫」へ伝わるものなのか、
あるいは逆に、

②「目の前の猫」を介して「見かけの心」で生じるものなのか、
それとも、

③「目の前の猫」と「見かけの心」の両方に同時に生じるものなのか、
ということです。

単純な話に思われるかも知れませんが、目の前の世界の性質を考える
とき、重要なポイントになるのは間違いありません。

後ほど(3-1)の(4)項でもお話することになりますが、このよ
うな重ね合わせは感覚や感情に留まらず、より高度な「私という思い」に
も密接な関連を持つことになります。つまり、

「私」=見かけの身体+見かけの心 ③

という図式③においては、様々な感覚や感情が見かけの身体や見かけの
心の適切な位置に配置されます。一方、図4の項目②や③に示すように、
目の前の対象を介して「私」に感情などが生み出されるのであれば、それ
は「私」について考えるとき、重要な意味を持つことになります。

つまり、「見ている」、あるいは「考えている」というより高度な思いも
適切な位置に配置されています。例えば「見ている」という行為について
は、見かけの視線の逆方向に「見ている私がいる」という思いが「見か
けの心」に生み出されます。「考えている」という場合には言語を用いる
ことが多いかと思いますが、言葉の使用に伴い「考えている私がいる」と
いう思いがやはり「見かけの心」に生み出されます。このように感覚や感
情、更には「私」という思いなど様々な特性が、目の前の世界の出来事
と関連して目の前の世界に展開するということは、「私の生成」に大きな
役割を果たすことになるはずです。

(2-2) 存在と認識

このテーマからは哲学の話をしようとしているのかと思われるかもし
れませんが、そうではありません。存在と認識が、物理空間と心理空間
とでどのように捉えられているかについての話になります。

まずは物理空間での話です。物理空間では、存在と認識の関係を直接結び付けるような事実は明らかになっていません。敢えて言えば、物質で構成された脳の機能によって認識が生まれるということであり、脳と認識との関係が論じられることはあっても、物質の存在と認識そのものの関係が論じられることはありません。

一方、コンピューターによって制御された機械が、その対象が何であるかを判断して答えを導き出すことを指して認識されたと表現されることがあります。確かに、その対象が何であるかを特定するコンピューターの情報処理の仕組みは、脳の情報処理の仕組みに類似しているところがあり、そのプロセスを指して認識されたと表現することは、ある意味、理にかなったことかもしれません。現に様々な機械がコンピューターを駆使して情報の処理を行い、高度な仕事をこなしているのは事実です。しかしそのプロセスは、人間などの生物に特有な認識のメカニズムと同じであると考えるのは無理がありそうです。

一方、心理空間では、「どのようにして心理空間に見かけの対象が生成されるのか?」、そして、「それがどのようにして認識につながるのか?」が、解決されるべき課題となります。前者についてはその詳しい仕組みはわからないものの、視覚や聴覚などの生理学的なシステムにより、例えば目の前の世界に視覚に基づく見かけの対象や、聴覚に基づく見かけの音が生み出され、そしてそれらが心理空間での存在となるのでしょう。一方後者については、脳の情報処理によりそれに関連した内容が重ね合わせのシステムによって、見かけの対象に重ね合わされることが認識につながるのではないかと推測しています。

図 5

目の前の世界



図 5 (a)をご覧ください。それが円であることはわかるかと思いますが、それ以外、何ら特徴らしいもののない図形が描かれています。そうとは言っても、図形が存在して

いること自体はもちろん分かると思います。次に図5(b)をご覧ください。先の図に新たな特徴が描き加えられています。それによりリンゴであろうと推測できると思います。つまり、何であるかは分からないものの存在そのものは分かるという低次の認識の段階から、それが何であるかが分かるという高次の認識の段階へと変化したことになります。その背景には「重ね合わせのシステム」が関与し、図形に意味が与えられたことによるのでしょう。

認識は目の前の世界からどこか別のステージで生じると考えられがちですが、そうではなく、見えていること、聞こえていることそれ自体が認識であることに、心理空間の特徴があると言えそうです。つまり認識には2つのタイプがあるということです。1つは心理空間に存在していること自体が認識であるということ（ステージ1）で、心理空間で完結しているタイプです。いま1つは対象が何であるかがわかるということ（ステージ2）で、脳の情報処理が関与し、重ね合わせのシステムで意味が付与されるタイプです。

第3章 なぜ「私」は生み出されたのか？

ここで取り挙げるのは次式で示される物理空間に存在する私ではなく、

私 = 肉体としての身体 + 知情意で示される抽象的な存在

②

次式で示される心理空間に存在する「私」についてです。

「私」 = 見かけの身体 + 見かけの心 ③

（3-1） 「私」を構成する2つの要素と2つのシステム

③式で示すように、「私」を構成するのは「見かけの身体」と「見かけの心」の2つの要素であり、それらを脳の情報処理の観点からサポート

しているのが「重ね合わせのシステム」と「同調のシステム」の2つです。つまり2つの要素とは

「見かけの身体」と「見かけの心」

であり、それらの関係をサポートしているのが

「重ね合わせのシステム」と「同調のシステム」

の2つのシステムです。

さらに、これらの中にあって、「私という存在」の核心部分を担っているのが「見かけの行為」であると言えます。つまり、これら2つの要素と2つのシステムから成り立つ「私」の理解の鍵となるのが「見かけの行為」であり、それらをバックアップしているのが、「重ね合わせのシステム」と「同調のシステム」だと言えます。「見かけの行為」により、「見かけの身体」は「私の身体」という意味を獲得し、また「見かけの心」は「私の心」という意味を獲得することになります。

これら2つ要素と2つのシステムはそれぞれ独立して存在しているわけではなく、相互に補完する関係にあり、全体で1つの「心の世界」を構成することになります。事実、2つの要素はいずれも同じ心理空間に存在しているということに留意していただきたいと思います。

これからそれらについて解説することになりますが、それらは相互に密接に関連していることから、話が重複することになります。ご了承ください。

（1）見かけの身体

「目の前の世界は物質の世界ではない」という主張は納得しづらいことでは、それ以上に納得しづらいのが、目の前の自らの身体 of 解釈です。それが肉体としての身体ではなく、脳の活動によって生み出された「見かけの身体」であるということはこれまでに話した通りですが、納得しづらいことでしょう。

目の前の見かけの身体が肉体としての身体であると誤って認識される原因はいろいろとあります。視覚の観点からすると、見かけの身体は目の前

に見えていること自体が存在であり、同時に認識となります。見かけの身体は視覚的に認識されることに加え、触覚、圧覚、痛覚などの感覚が見かけの身体に重ね合わされ、自らの身体としての意味が更に深まることとなります。詳細は、(1-1)「見かけの世界」の項で紹介した当該の論文を参照していただけたらと思います。ただここで1つお話しておきたいのは、のちほどお話する「見かけの行為」は「見かけの身体」、さらには「見かけの心」の解釈に大きな役割を担っているという点です。

目の前の身体が自らの身体であると認識されるには、乳幼児期からの一連の体験が大きな役割を担っていることはご存じの通りです。乳児は寝返りができない段階から、頭上に吊るされたおもちゃを見つめ、それに向けて手を伸ばすなどの行為を行い、目の前に見えている見かけの手が自らの思いに連動して展開するという「見かけの行為」を経験することとなります。さらには目の前の見かけの手がおもちゃに触れることによってもたらされる感覚から、自らの身体としての認識が更に深まることとなります。見かけの身体そのものは受動的な存在ですが、いまの例にもあるように、見かけの行為を通して能動的な存在となります。ここで話しているのはもちろん、肉体としての身体が存在するという前提での話であり、見かけの行為は肉体としての身体の行為に基づくものです。このように、見かけの身体が肉体としての身体の意味を獲得するうえで、見かけの身体に伴う見かけの行為が重要な役割を担っていることに注意が必要です。

(2) 見かけの心

心がどのように解釈されているかと言えば、例えば、比較的低次の活動については、私が見ている、私が聞いている、私が手を動かしている、などの行為を挙げることができます。一方、より高度な活動としては、私が考えている、私が記憶している、私が決断する、などの行為を挙げることができます。

確かに、これらの行為は脳の情報処理に基づくのは間違いのない事実です。しかし同時にこれら意識化された現象は心の世界における「見かけ

の行為」であり、見かけの行為に付随して「見かけの心」が生み出され、同時に「私という思い」が生み出されると考えることができそうです。

これまでもお話しているように、「見かけの心」は「見かけの身体」とは異なり、直接認識することはできません。「私が見ている」などの見かけの行為に伴い認識されることになります。例えば「私が見ている」という思いからは「重ね合わせのシステム」によって、見かけの視線の逆方向、つまり見かけの身体の目の背後に、「見ている私がいる」という思いが生み出され、その存在場所を獲得することになります。さらには同調のシステムにより、見かけの身体を操作できるという思いから、行為する者、つまり「行為者」としての意味を獲得することになります。

「見かけの心」は、「何々の行為を行っている」という「見かけの行為」にその起源を有していると言えそうです。詳細は（３－２）の（３）項でお話することになります。

「見かけの心」と表現するのは、これもすでにお話しているように、「本来の心の世界」が目の前の自らの身体を含めた目の前の世界全体を表すのに対し、それとは異なるという理由からです。

（３）見かけの行為

見かけの行為とは、目の前の世界において見かけの身体に現れる行為のことを指します。例えば、目の前に展開する、私が見ている、私が手を動かしている、私が考えているなど、私たちが日常経験している行為は、確かに肉体としての身体において、それらに対応する実体を伴う行為が行なわれています。「私が見ている」ということについては、肉体としての眼が対象に向けられています。「私が手を動かしている」ということについては、肉体としての手が対象に向かって動いています。「私が考えている」ということに関しては、脳が情報の処理を行っています。

ただし、目の前に展開するそれらの行為は、重ね合わせや同調のシステムによって意味づけされているものの、あくまでも見かけの行為であり、実体を伴う行為を行っているわけではありません。見かけの行為により

見かけの身体と見かけの心が結び付けられ、切り離すことができない一体感が生み出される原因になっていると考えることができそうです。

身体と心は別の存在であるという思いが根強いかと思います。事実②式で示されるように、一般常識では別の存在です。しかし心の世界においては、両者は一体をなす存在ですが、その一体感を生み出し両者を結び付けているのが「見かけの行為」であると言えそうです。「見かけの行為」によって見かけの身体は肉体としての身体の意味を獲得し、一方、「見かけの行為」が自らの思いに連動して見かけの身体の動きとして現れることで、見かけの心は心としての意味を獲得することになると言えます。詳細はのちほど（3－2）の（3）項でお話することになります。

（4）重ね合わせと同調のシステム

重ね合わせのシステムとは、（2－1）の（2）項でお話したように、心理空間の中に存在する対象にさまざまな特質が重ね合わされることを指します。例えば、目の前のテレビ画面の登場人物に音声を重ねるように、ある感覚の上に別の感覚の特質が重なり合ったり、目の前の子猫に可愛いという感情が重なり合ったり、さらには「子猫を私が見ている」という思いから見かけの心に可愛いという思いが生じることなどを表します。このように一見異種の特質が心理空間の中で適切な位置に重なり合って存在するのを支えているのが重ね合わせのシステムです。

同調のシステムとは、これも（2－1）の（2）項でお話したことで、見かけの身体と肉体としての身体が同調して動くことを指します。目の前の見かけの手が見かけのコーヒーカップに向けて動くとき、肉体としての手も物質としてのコーヒーカップに向けて動いています。これが同調のシステムです。ここで、どちらの動きが先になるかが問題になります。一般常識では、肉体としての手の動きが先で、それが元になって見かけの物質の世界で見かけの手の動きがそれに続くと考えられています。確かに、目の前の世界が物質の世界のコピーであることを考えれば、ごく自然な考えであると思われます。

ただし、ここで1つ問題が生じます。それは「見えている」ことがどのような働きを担っているかについてです。例えば、物質の世界においてコーヒーカップに向けて手を伸ばすとき、手が正しくカップに向かっていくかどうかをどのように認識しているのかということが問題になります。単純に考えて、カップに向かう手の状態がわかっていなければ、手の動きを制御することはできないのではないのでしょうか。

確かに最近の機械は優れた機能を有しており、人間のような意識化された現象が生じていなくても巧みに課題をこなすことができます。たぶん人間とは異なる情報処理のシステムを構築しているからでしょう。ただし、ここで問題にしているのは私たち人間の情報処理の話であり、この点については次の節でお話することにします。

(3-2) 心の世界の中の「私」という存在

すでにお話しているように、この論文は私、あるいは「私」について次のような3つの図式のもとに話を進めています。つまり、「私という存在」は「私の身体」と「私の心」という2つの要素から成り立っているという考えから、

私＝私の身体＋私の心 ①

として話を始めています。そして、一般常識での私は

私＝肉体としての身体＋知情意で示されるような抽象的な心 ②
から成り立っていると考えられていると言えるでしょう。

一方、この論文での「私」は、私の身体は「見かけの身体」であり、私の心は「見かけの心」であることから

「私」＝見かけの身体＋見かけの心 ③
から成り立っているとして話を進めています。

(1) 自らの心の世界に内在する「私」

図 2(c)

物質の世界

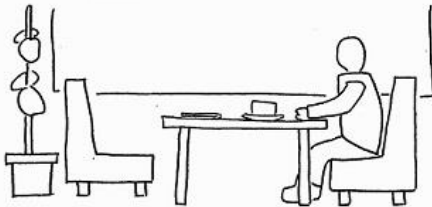


図 2(b)

目の前の世界



改めて図 2 を用いて話を進めることにしましょう。まず図 2(c)をご覧ください。物質の世界に②式で示される私が存在している様子を表しています。一方図 2(b)は、心の世界の中に③式で示される「私」が存在している状況を表しています。③式では「私」が「見かけの身体」と「見かけの心」から成り立っていることが示されていることから、「私」が周りの世界から独立して存在しているかの印象を持たれるかもしれません。しかし、実際はそうではありません。

「脳の活動によって生み出された世界を心の世界とする」という定義のもとでは、「心の世界」は目の前の見かけの身体を含め、目の前に展開する世界のすべてであることになります。

この解釈からすると、まことに奇妙なことではありますが、「私」は「見かけの身体」と「見かけの心」から成り立ち、自らの心の世界に内在していることになります。言わば入れ子細工の様相を呈していることになります。したがって「なぜ私は生み出されたのか？」という問い掛けは、「なぜ目の前の世界は生み出されたのか？」という問いにまず答えを出さなければならないことになります。この点については次の項でお話することになります。

(2) 外界のコピーであることの意味

人間を始めとして様々な生物が脳による優れた情報処理能力を持っているのは間違いありません。しかし、コンピューターほどの膨大な記憶容量を有しているわけではありませんし、また情報の処理スピードもコンピューターに遠く及ばないのも事実です。しかし、そのような条件のもとにおいても私たちは外界で巧みに生きています。その弱点を補強するのが外界のコピーを作成し、それを利用することだと言えます。

目の前に見えている世界と自らの身体は、見かけの物質の世界と見かけの身体であり、物質の世界と肉体としての身体の、言わばコピーであると言えます。もちろん完全なコピーではありません。事実、目の前に誰かの顔写真を置いてそれを見てみれば一目瞭然です。視線を少しずらただけで写真はぼやけてしまい、誰の顔かわからなくなります。「視線がずれることで眼の解像度が低下するからだろう」という反論があらうかと思えます。正にその通りです。解像度の低さが原因となって、目の前の世界にそのぼやけた像が結果として現れているわけです。つまり、目の前の世界は物質の世界ではなく、脳の活動によって生み出された見かけの世界だということの証拠の1つになると思うのですが、如何でしょうか。

なお、物質の世界（外界）が目の前の世界と如何に異なるかは、論文「心はどこにあるのか？」の第2章第1節の「実は奇妙な物質の世界」で説明していますので、参照していただければ幸いです。

ここで「外界のコピー」と表現するのは、2つの世界にそれぞれ配置されている対象の外形と相互の位置関係です。例えば、図2(b)に示すように、目の前の世界に存在するコーヒーカップは物質としてのカップの外形を表し、かつ見かけの身体の前方に位置しています。物質の世界においても同様に、図2(a)に示すように、物質としてのコーヒーカップは肉体としての身体の前方に存在しています。その関係を「外界のコピー」と表現しています。

外界のコピーと言っても、ただの写しというわけではありません。その背景には「重ね合わせのシステム」と「同調のシステム」、更には「認

識」という重要な要素が関与しています。まず重ね合わせのシステムによって目の前のコーヒーカップはコーヒーを飲むための器という意味が付与され、目の前の手は肉体としての手の意味を持つことになります。それによってコーヒーを飲みたいという「欲求」に対し、目の前のコーヒーカップは行動の「目標（誘因）」となり、目の前の手はコーヒーを飲む行為の「手段」となります。その背景には、目の前の世界での存在は同時に認識でもあることが重要な役割を担っていることに注意が必要です。

外界のコピーの存在によってもたらされる利点として、同調のシステムによる情報処理の効率化を挙げることができます。物質の世界において、肉体としての手が物質としてのコーヒーカップに向けて移動するとき、同調のシステムに基づき、目の前の世界において見かけの手が見かけのコーヒーカップに向けて移動します。この見かけの手の動きを指標とすることで、物質の世界での肉体としての手を制御することが可能になります。

このとき、目の前の世界に存在することが同時に認識でもあることが、情報処理のステップの簡略化に貢献することになります。例えば目の前の見かけの対象であるコーヒーカップに見かけの手を伸ばすとき、手がカップに対して左右にずれていれば、「見えていることが認識でもある」ことから、ずれが認識されます。認識というと目の前の状況から一旦別のフェーズに転送されて行われると考えられがちですが、しかし実際は目の前の世界で完結しています。

どのようにして同調のシステムが形成されるかについては、(3-2)の(4)項でお話することになります。

言葉の役割

情報処理について考えるとき、注意すべきことの1つに言葉の役割を挙げることができます。つまり、目の前の世界で繰り広げられる活動は、言葉を用いなければ制御できないと考えるのは必ずしも正しいとは言えないということです。図2(b)に示すように、コーヒーカップに手を伸ばしてそれを掴むという場面を再び例にとって考えてみましょう。台風の影響

響で停電し、うす暗いなかローソクの灯りを頼りに注意深く手をカップに近づけなければならないようなとき、「近づいている」という言葉が思い浮かぶかと思います。しかし「近づいている」という言葉があつて初めて近づいていることが認識されるのではなく、「近づいている」という目の前の情景自体が認識であり、その結果として「近づいている」という思いが生じ、それが言語化されるというのが正しい解釈です。つまり、認識とその言語化には時間的なずれがあるということです。事実、私たちの日頃の行動を考えてみれば、そのほとんどが言語化されていません。あるいは言語機能を持たないと考えられている動物の場合でも、行動を制御できています。ある一定程度の進化を遂げた動物は私たち人間と同様に、見かけの身体と見かけの物質の世界という枠組みのなかで行動を制御しているのではないかと考えられます。

確かに高度な論理を駆使するような場合には言葉が必要でしょうし、重要な働きを担っているのは間違いのないでしょう。しかし、言葉がなければ手をカップに近づける行動を制御できないと考えるのは間違いだということを指摘しておきたいと思います。

このような例からも分かるように、心理空間に存在することは同時に認識でもあり、さらには、脳の情報処理の結果が重ね合わせのシステムにより、目の前の対象に様々な意味づけがなされることになります。前項で指摘した「なぜ目の前の世界は生み出されたのか？」の回答の一端は、情報処理の上で「心理空間に外界のコピーを生み出すことが好都合だから」ということになるでしょう。

(3) 「見かけの行為」から「私という思い」の生成

すでにお話したように、「私という思い」は「見かけの心」の中核を成すものですが、それ自体が認識されるわけではなく、「見かけの行為」から派生する「行為する者」、つまり「行為者」という思いから生み出されると考えられます。なぜそのように考えられるかについて、(3-1)の(3)項でお話した「私が見ている」、「私が手を動かしている」(p 1

8)、「私が考えている」などの「見かけの行為」を通して考えてみましょう。

最初の例は、「私が見ている」という行為についてです。「見る」という行為により、目の前に見かけの身体を含めた見かけの物質の世界が現れますが、前にもお話したように、実際は「私」がそれらを見ているわけではなく、脳の情報処理の結果としてそこに存在しているというのが正しい解釈です。もちろん物質の世界そのものがそこに存在しているという意味ではありません。しかし私たちはそうとは考えず、それら目の前の世界を物質の世界であると誤って認識し、「私が見ている」という思いを持つことになります。その結果、見かけの視線の逆方向に「見ている私がいる」という思いが生み出されることになります。

「見ている」という「見かけの行為」を行っているのはどのような存在なのか？その思いの生成を担っているのが「行為者」という思いであると言えます。つまり「見かけの行為」に基づいて、その行為を行っている存在として「行為者」という思いが生じ、その結果として「私という思い」が生み出されることにつながると言えます。別の観点からすれば、「私という思い」を介して「見かけの行為」に「行為者」という思いが生み出されるとも言えます。図式で表せば

「見かけの行為」→「行為者」→「私という思い」

あるいは、

「見かけの行為」→「行為者」←「私という思い」 （注：2番目の矢印の向きが逆）

ということになります。みなさんご自身で考えていただくと、その意味が実感できるのではないのでしょうか？

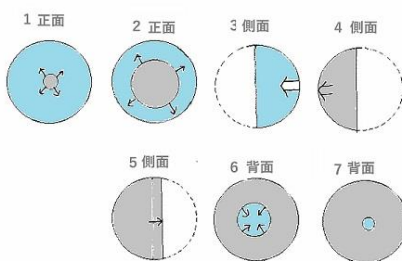
2つ目の例として、目の前の対象に向けて手を動かす、という場合について考えてみましょう。まず肉体としての手を動かそうという思いが生じ、それと同時に肉体としての手が動きます。それを反映して目の前の世界で見かけの手が動きます。その「見かけの行為」が認識されることに伴い、

「私が手を動かしている」という思いが生じ、目の前の手は自らの手の意味を獲得し、その「私が手を動かしている」という思いから「行為者」としての意味が形成され、同時に「私という思い」が形成されることになります。

この場合も皆さんご自身で試してみてください。キーボードに向かって文字を打ち込もうとしたとき、目の前の指が動き、「私の意志で指を動かしている」という思いが生じると思います。その体験から「行為者」としての意味が生み出され、「私という思い」の存在が確認されるのではないのでしょうか？ もっとも、「自分ほどタイピングのスキルがある者は、無意識に打っている」と思う人もおいでかと思います。確かに指を動かすのは無意識的ではあっても、打ち込む内容は「私という思い」に基づいているのは間違いないのではないのでしょうか？

3つ目の例として「私が考えている」という場合についても検討してみましょう。この場合は、前者の2つのケースとは異なり、高度な機能が関係します。例えば、伸縮自在のゴムで作られた球体に穴を1個開けて、その表裏をひっくり返す場面を想像してみてください。多分「見かけの

図6 球体の反転



心」の中で球体のイメージが思い浮かび、その穴を広げていってくりと反転させることができると思います。「簡単なことだよ」と思われることでしょう。しかし、それを分かるように表現するとなると、図6に示すように案外難しいことがわかります。つまり、①から②にかけて穴を広げ、③から

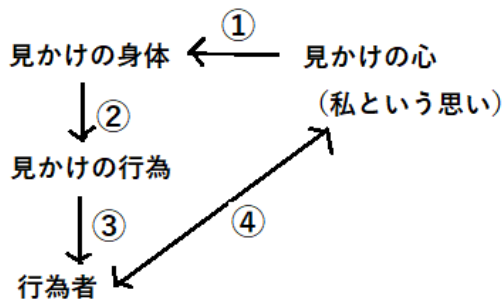
④で半球を反転し、⑤から⑦で裏面を引き延ばしています。

イメージを作成してそれを操作できるのは脳の情報処理のおかげでしょうが、同時に生み出されるイメージは心理空間内の出来事です。このような操作が自動的に行われているとは思えず、「私が考えている」という

「見かけの行為」に基づいていると言えるでしょう。そこから「行為者」としての意味が生み出され、同時に「私という思い」が生み出されると考えられます。

これまでの話を、図7を使ってまとめてみましょう。

図7 私という思いの生成



① 「見かけの心」から「見かけの身体」に向けて指令が出される。

② 「見かけの身体」に「見かけの行為」が現れる。

③ ①と②を通して「行為者」という思いが生じる。

④ 「行為者」という思いから「見か

けの心」に「私という思い」が生じる。

⑤ ①から④を通して「見かけの心」に意思などの高度な観念が生み出される。

要約すれば、様々な「見かけの行為」により「行為者」としての意味が形成され、同時に見かけの視線の背後に「私という思い」が生み出されることになる。

一般常識でも「身体と心の一体感」には根強いものがあり、両者は切り離すことができないと考えられていますが、それを反映して「見かけの身体」と「見かけの心」も同様に、両者の間には強い一体感があります。その一体感は両者が共に脳の活動によって同一の心理空間に生み出され、「見かけの行為」で結び付けられていることに由来するからだと考えられます。

(4) 2つの世界をつなぐ記憶の役割

脳の活動によって心理空間に生み出されるのは「私」だけではありません。目の前に展開する世界のすべてが、脳の活動によって生み出された物質の世界と肉体としての身体のコピーです。その役割は情報処理の効率化と簡略化、さらには行動の判断、決断、実行のためだと考えられます。事実、「物質の世界」で行動を起こすとき、「目の前に広がる世界」、つまり「心の世界」から得られる情報を利用しているのは間違いないでしょう。この点について次に検討しましょう。

(例) 水たまりを避ける行為

例えば、目の前に水たまりがあった場合、それを避けて通ると思います。では、「どうして避けることができるのか？」という問い掛けに、皆さんはどのように回答されるのでしょうか？「そんなことは当たり前ではないか。水たまりが見えていれば、濡れたくないと思うからだろう」と回答されるのではないのでしょうか。

ただし、この回答には問題があります。目の前に見えている世界は、すでに度々お話しているように、脳の活動によって生み出された見かけの物質の世界、すなわち心の世界であり、そこでの見かけの行為が物質の世界の存在である肉体としての身体の動きとどのような関係があるのか？という問題です。この回避行動の背景には、重ね合わせのシステムによる水の性質についての知識があり、かつそれを行動に移すための同調のシステムによる身体の制御があると言えます。それらによって、水たまりを回避する行動が可能になるという事実に注意する必要があります。

これらのシステムを有効にするカギを握るのが記憶ではないかと考えています。もっとも、「それは当たり前のことではないか。水についての知識（記憶）があり、濡れたくないという思いがあるからだろう」というご意見でしょう。しかし、ここで取り上げている問題は、濡れたくないという心理現象が、水たまりを避けて通るという物理現象とどのような

関係にあるのか？という話であることにご注意いただきたいと思います。つまり心理現象と物理現象の橋渡しをしているのが記憶ではないかと推測しているのです。

脳の活動によって、心理空間に見かけの世界がどのようにして生み出されるのかはわかりませんが、因果関係があるのは間違いないでしょう。

「心理現象は脳の活動の影のような存在か？」という問い掛けがありますが、脳は無用なものをわざわざ生み出すとは思えません。この問題は「目の前の世界に存在することは同時に認識でもある」という事実が重要な意味を持つと同時に、その背後には記憶が関係していると推測しています。このような認識と記憶が関係するシステムは、成長の過程で様々な経験を通して形成されると考えられます。いま少し単純化された次のようなケースについて考えてみましょう。

(例) 乳児の行動にみられる、試行錯誤を通しての記憶の形成

図 8 乳児の行動

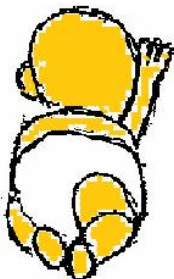


図 8 に示すように、まだ上手く這うことができないような乳児が、目の前の熊のぬいぐるみを掴もうとして手を伸ばしている状況について考えてみましょう。このときの乳児は手の動かし方にあまり慣れていない、という設定で考えます。

もしぬいぐるみに対して見かけの手の向きがずれていれば、何とかぬいぐるみに辿り着きたいという思いから、手の向きを修正しようという思いが生まれます。それに対応して肉体としての手が移動し、その結果が目の前に見かけの手の動きとして現われます。

このときの経験、つまり「このように力を入れれば、見かけの手が動き、対象に近づくことができる」という認識に基づく経験が成功体験と

なり、その積み重ねで力の入れ方が記憶として定着することになり、同調のシステムが形成されることになります。また一方、重ね合わせのシステムにより、目の前の見かけの手が肉体としての手であるという意味の獲得につながり、それが記憶として定着することになります。

乳児にとって認識されるのは、目の前に展開するぬいぐるみと、それに対する見かけの手の動きであり、物質の世界の情景と肉体としての手の動きそのものではありません。また、このような行為は最初から上手くいくわけではなく、いわゆる試行錯誤を重ねることで見かけの手と肉体としての手の動きが記憶を介して関係性が確立され、スムーズな動きにつながっていくと考えることができそうです。

見かけの手をぬいぐるみに近づけようとして試行錯誤で動かしているとき、そのときの行為はすべて認識でもあります。あるとき偶然見かけの手がぬいぐるみに近づく動きをしたとき、それは認識でもあるので、その思いが記憶に刻まれます。直接的な関係ではないかもしれませんが、間接的に認識が行動に結びついていると考えることができそうです。つまり、見かけの行為が肉体としての行為と結びつくのは、試行錯誤の結果が記憶に蓄積されることによるのではないかと考えています。

心理現象としての見かけの行為と物理現象としての肉体による運動は、もしかしたら両者が直接的に結びつく相互作用の仕組みがあるのかもしれませんが、現時点では、記憶という仕組みを介することで、相互の間に関連性が形成されるのではないかと推測しています。記憶は活性化されなければ単なる痕跡のようなものですが、一旦活性化されると認識へとつながる特性を持っている点に注目しています。

このような現象、つまり手を動かすことで対象に近づくことができるという行為は、目の前の世界が物質の世界であるという一般常識の立場からすれば、ごく当たり前のことであり、疑問を差し挟む余地などないということでしょう。しかし目の前の世界が脳の活動によって生み出された見かけの物質の世界であることを考えるとき、そう単純な話ではないことが分かります。またこのような仕組みが如何に有効であるかは、私たちの日ごろの生活を考えてみれば一目瞭然でしょう。

見かけの身体は目の前に見えていることが認識であり、並びに自らの思いに伴って動くことで「私の身体」の意味を獲得することにつながると考えられます。一方、身体を動かそうという思いのもと、目の前で身体に動きが生まれますが、その見かけの行為に伴い、行為者という意味が獲得され、それが「私の心」の意味の獲得につながると考えられます。つまり、

「私」＝見かけの身体＋見かけの心 ③

の図式から、一般常識としての

私＝肉体としての身体＋私の心（知情意）②

の構図が形成されることになります。

（５）なぜ「私」は生み出されたのか？

「なぜ「私」は生み出されたのか？」という問い掛けに対する回答は、（３－２）の第（１）項から第（４）項で、お話してきたことの中にすべてがあります。そこで考察を進めるにあたっては、（３－２）項でお話したことが元になります。内容が重複することになりますが、ご了承ください。

第（１）項では、脳の活動によって心理空間に生み出されるのは「私」だけではなく、「私」を含めた目の前に広がる世界そのものがそうであることから、「なぜ「私」は生み出されたのか？」という問い掛けには、まず「なぜ目の前の世界は生み出されたのか？」という問いに答えを出さなければならない、という指摘がされました。

その回答として第（２）項で、私たち生物は情報処理の効率化と簡略化を図るには、自らの身体を含めた外界のコピーを作成することが有効だからだ、と結論づけました。事実、それがコピーであるとは思えないほどの巧みな構成になっており、私たち自身でもそうとは気づかないほどであり、それが本論文の副題を「脳によって仕掛けられた難解なトリッ

ク」とした理由でもあります。このようなシステムの背景には重ね合わせと同調のシステムが有効に機能していると考えられます。また、心理空間に存在することは同時に認識でもあることが、情報処理の効率化と簡略化に寄与していると考えています。

更に、第（３）項では、自らの心の中核を成す「私という思い」の生成について考察し、心理空間で繰り返される「見かけの身体」にまつわる「見かけの行為」から「私という思い」が生み出される、との結論を導きました。事実、「見かけの行為」は単なる静的な現象ではなく、自らの思いに導かれて行動する動的な現象であり、そこから意思のような高度な心理活動が誕生することが伺えます。

そして第（４）項では、心の世界と物質の世界という異なる２つの世界をつなぐ仕組みについて考察し、その役割の一端を担うのは記憶ではないか？という推論がなされました。

事実、記憶そのものは脳の中の組織の一部としての機能であり、普段は静的な存在ですが、いったん活性化されると心理空間に非物質的な現象を生み出す機能を有しています。心身問題解決につながる１つの鍵になるのではないかと考えています。

まとめ

本論文の結論は、「心理空間の特徴である認識という性質を活用するために、「私」を含めた外界のコピーが心理空間に生み出された」、ということになります。つまり脳の活動によって生み出された世界を心の世界とする定義のもとでは、「私」は自らの心の世界に内在していることになります。繰り返しになりますが、そのことに私たちは気づいていないわけで、それこそが「難解なトリック」と言えるでしょう。

自らの心の世界に「私」が生み出されたことが、知情意というより高度な心理活動の形成へとつながると推測できるでしょう。

生命の身体面での進化はよく知られている通りで、何十億年もかけて成し遂げられてきました。心理面においても同様に進化がみられるはず

であり、それは心の進化とでも言えそうです。その実態はまだ明らかになっていないものの、その進化の道のりの縮図の一旦は、乳幼児の発達の過程に垣間見ることができるような気がしています。

(追記)

本論文のタイトルの「なぜ「私」は生み出されたのか？」の「なぜ」という言葉には2通りの意味があります。1つは「どのような経緯で「私」は生み出されたのか？」という意味で、それについては本文を通じて説明してきたつもりです。いま1つは「どのような役割を「私」が担っているのか？」という意味で、それには記憶が関与しているのではないかとの推測を行いましたが、それでは不十分であることは承知しています。その回答には「認識とは何か？」という問い掛けに回答を得る必要があると考えています。事実、心理空間に存在することは同時に認識でもある、とお話してきましたが、では「認識とは何か？」という問題が残ることになります。知る、分かる、認識する、という一連の現象はどのような意味を持つのか？哲学ではなく科学の立場から明らかにする必要があるそうです。

あとがき

最後まで目を通していただけたのであればまことに幸いです。多分、「そんなことはあり得ない」というのが大方のご意見かと思います。事実、かつての同僚らにも読んでもらっていますが、大方はそのような感想でした。

私はと申しますと、「私とは何か？」という問題に最初から関心があったわけではありません。そのような漠然とした問題に答えを出せるとは思っていませんでした。当初の関心は、目の前の見かけの物質の世界が情報処理においてどのような役割を果たしているのか？についてでした。しかし、それが幸いしたようです。最初から「私とは何か？」という問題

に取り組もうとしていたら、袋小路に迷い込んでしまっていたものと思います。事実、最初から「私とは何か？」という問題に取り組むのは無理があるかと思います。余りに常識的な、それだけに疑問を差しはさむことのできない強固な理屈が用意されているからです。それを打破するためにはまず目の前の世界の本質を明らかにすることであり、それには目の前の世界を物質の世界と解釈すると矛盾が生じることに気づくことだと考えています。

人工知能の発展には目を見張るものがあります。私が人工知能について一番関心を寄せているのは、機械が自らの身体を持ち、それを認識したとき、どのような変化が現れるかにあります。本稿でお話しているように、私たち人間にとって、自らの身体の認識が「私」の生成に大きな役割を担っていると考えているからです。

フランスの哲学者メルロポンティは身体の存在の重要性について語っているとのこと。私の考えが彼の考えと一致するかはわかりませんが、これまでの話からおわかりのように、私も、身体、特に見かけの身体に現れる「見かけの行為」の重要性に注目しています。いま一度、彼の身体論を考察し直してみようと思っていますところです。

AI の進歩から様々な仮説が提唱されています。しかし仮説よりも大切なのは、共通の理解が何なのかを明らかにする段階に来ているということです。僭越ではありますが、その共通の認識の基礎となるのは、目の前の自らの身体を含めた目の前に広がる世界は脳の活動によって生み出された「見かけの世界」であることの理解であると考えています。

郊外に住んでいることから、いろいろな生き物が部屋に迷い込んできます。今朝も体長 2 ミリほどの昆虫が外に出ようとしてガラス窓の内側を這い回っていました。体長 2 ミリとは言ってもその身体の仕組みは巧みなものです。6 本の足を巧みに操って滑らかなガラスの上を滑り落ちること

もなく歩き回り、羽を使って空中を飛翔することも可能です。

その活動を制御する機能も侮れません。光の方向を感知する視覚機能を備え、餌を検知するための、たぶん分子レベルの検知能力を持つ感覚器官を備え、更には子孫を残すための生殖機能も有しています。このような生物の優れた能力のことを考えれば、私たち高等生物の認識能力は私たちの理解を超える、きっと優れたものであろうと想像しています。

この小さな同胞の行く末は分かりませんが、自らの一生をまっとうできることを願いつつ、窓を開けてお引き取りいただきました。2025年、秋の朝のことです。

自己紹介

余りに常識離れした話であることから、エセ科学の危ない人物の話ではないかと思われるかもしれませんが、簡単に自己紹介をさせていただきます。私（白石 茂）は早稲田大学(東京/日本)大学院博士課程（心理学専攻）を修了し、その後東京都内の大学で非常勤の講師（心理学担当）を長年務めて参りました。専門教育を受けているからといってその人の考えが科学的だという証には必ずしもならない、ということは重々承知しています。ただ口はばったいことを言うようですが、客観的な事実の積み重ねで論理を展開する訓練は積んできたつもりです。批判的に原稿を読んで頂き、感想や反論を「4 ご意見・ご質問」から送っていただければ幸いです。

論文のアドレス

日本語版：心はどこにあるのか？ 脳によって仕掛けられた難解なトリック

URL: <https://www.where-mind-j.com> (A4 版 110 ページ)

(注：論文は PDF ファイルで 110 ページとかなりの分量ですが、興味深いトピックを紹介しながら、分かり易い解説を心掛けたつもりです。)

English version: Where is the mind? A hard trick set by the brain

URL: <https://www.where-mind-e.com> (110pages on A4 paper)

日本語版：私とは何か？ 脳によって仕掛けられた難解なトリック
(A4 版 30 ページ)

URL: <https://www.what-am-i-j.com>

(注：論文「心はどこにあるのか？」の第4章第3節を重点的に解説しています。A4 版 30 ページほどで、ホームページ上で読めるとともに、PDF ファイルをダウンロードしても読むことができます。)

English version: What am I? A hard trick set by the brain

URL: <https://www.what-am-i-e.com> (30pages on A4 paper)

日本語版：見えるとは何か？ 脳によって仕掛けられた難解なトリック
(A4 版 10 ページ)

URL: <https://www.what-visible-j.com>

(注：謎解きのすべてのスタートは「見えるとは何を意味しているのか？」を理解することにあります。この点に焦点を当てて簡潔な解説を心掛けています。)

English version: What is being visible? A hard trick set by the brain

URL: <https://www.what-visible-e.com> (10pages on A4 paper)